

買い物は楽しく

高齢者向けのスーパーマーケット

高齢者向けのスーパーマーケットが、イギリスでオープンした。「Help the Aged」の調査によれば、イギリスの75歳以上高齢者の10人に1人が地元のスーパーでの買い物に困っているという。高齢者向けのスーパーでは、すべてのショッピングカートに拡大鏡が備えつけられ、高齢者が疲れたときには、カートがいすにもなる。視力障害者のために、野菜類の量をはかる音声スケールもある。店内にはコーヒーを飲みながら友人とおしゃべりできる休憩室があり、コイン式のマッサージ・チェアも楽しめる。店内が込み合わないよう通路は幅広く、ゆったりとした音楽が流れ、天井照明は明るく、床面には転倒防止加工が施されている。

このイギリスでの試みは、ドイツ・ベルリンのKaiser Senioren Supermarktをお手本にしている。Kaiserの地域マネージャーのTobias Tuchlenskilによれば、これは高齢者のためのパイロットプロジェクトであり、ドイツ全土に広めていくことを計画しているという。ドイツの高齢化はさらに進むと予想されており、このようなスーパーは流行の先駆けになると考えられている。実際に利用している高齢者は、だれにも急がされることなく自分のペースで買い物ができることに喜びを感じている。

我が国でもコンビニエンスストア各社が高齢者に対応した店づくりを行っている。ローソンは、2006年7月に高齢者向けコンビニ(兵庫県淡路市)を開店した。白髪染め、和菓子などの品揃えを増やし、座って飲食や会話を楽しめる休憩コーナーを設けた。セブン-イレブン・ジャパンでは、いわゆる「ご用聞き」サービスを開始している。全店の値札を2倍の大きさにし、また体を預けても倒れない設計の買い物カートも導入する予定である。ファミリーマートではこの秋以降の新規店舗には、通路幅を広げ専用のレジ台を設置して高齢者や障害者車いす対応をはかる。さらに、店員も高齢者というシルバーコンビニも神戸市に誕生している。団塊の世代の大量退職を前に、雇用と客層の両面で需要があると見込まれている。

食べ物を小売にする、調理済みの製品の充実、宅配などのサービスから、双眼鏡や休憩室など店内で快適に過ごすための環境づくりが各国で行われている。これら的高齢者向けスーパーのコンセプトは、高齢者世代が手軽に、そして楽しく買い物ができることである。高齢者にとって「食」は大変重要なものである。高齢者のニーズをさらにリサーチして、買い物に行くことが楽しくなるようなスーパーのさらなる充実が望まれる。(鶴若麻理)

参考: Supermarkets for older people, Nursing Older People, 19(1), 2007, p.5.
Jess Smee, Mum's gone to Iceland-and Grandma's gone to Kaisers, Guardian, 17/01/2007
「コンビニ 高齢者に優しく」日本経済新聞社(2007年3月8日付)
Help the Aged =<http://www.helptheaged.org.uk/en-gb/>

「捨てられない」モノと気持ちの整理を支援

住まいの「片付け」を手伝う専門業者が活躍

「○○の記念品だから」「昔は毎日これを使っていたから」「いつかは必要になるから」など、さまざまな理由でモノをため込む高齢者は少なくない。他の人にとってはただの「ガラクタ」に見えるものを大量にため込み、自宅が使わないモノであふれ、ついにはそのモノよりも高い費用を払って貸倉庫を利用する。アメリカでは今そんな「ため込み症」が深刻な問題になっている。

心理学者のRandy Frostが1990年代初頭から取り組んできた「強迫性ため込み症」についての調査結果がある。それによると「ため込み症」の人は全米に400万人いると見られ、さらにそれよりはるかに多数の「散らかし症」の人がいるという。Frostはこの「散らかし症」の人の行動を分析し、①使わない物の強迫的所有、②使用不能なまで散らかった居住空間、③ため込んだ物が使いこなせない苦悩、の三つの特徴を発見した。Frostが顧問を務めるNPOでは、これらを症状の重さによって5段階のレベルに区分し、「常習的散らかし症」の人向けにワークショップ等を開いて片付けの支援やアドバイスを行っている。

このように「ため込み症」や「散らかし症」の人に対して片付けを支援したり、アドバイスをしたりする専門家はprofessional organizerと呼ばれる。片付け支援は依頼者の最も私的な部分に触れるデリケートな面もあるので、依頼者の心理面への細かな配慮を要する、専門性の高い仕事である。The National Association of Professional Organizersはそうした専門家3,900人を抱え、片付け支援専門のビジネスを展開している。

例えば配偶者を失った高齢者が小さな家に住み替える場合、さまざまなものを整理し、不要なものを処分する必要に迫られる。そんなとき、高齢者は往々にして何十年も愛用してきた物や、思い出と深く結びついた物を廃棄する気になれない。すると「廃棄」をめぐって高齢者と子どもとはかく大揉めになりやすい。そんなとき、片付けの相談に乗り、支援をしてくれるのがprofessional organizerである。依頼者にとって捨てがたいモノの思い出に丁寧に耳を傾け、その実物をカメラやビデオに収録する。思い出は記録に残され、現物は「思い出箱」に収納する。「この素晴らしいものを使っていたために、どの慈善団体に贈るのがよいでしょうか」と依頼者に相談する。依頼者の意向を尊重し「とっておくもの」「譲るもの」「捨てるもの」はこうして決められる。多少費用がかさんでも、モノの処分をめぐって家族が不要な争いをすることなくprofessional organizerは片付け支援の仕事を手際よくやり遂げる。

参考: http://www.aarpmagazine.org/lifestyle/conquer_clutter.html
<http://www.squalorsurvivors.com/overcoming/index.shtml>
http://www.napo.net/about_napo/